マイブック賞

熊日出版

通潤橋 水が渡る橋 ―― ピエロの会刊

子どもたちの「志の芯」に

2012年の米の食味ランキングで、熊本産が1位に輝いた。江戸時代にも肥後の米はトップレベルの人気だったらしい。おいしさの一つは「水」だろうと、熊本人なら思うはずだ。

「通潤橋」の話は、小さいころから幾度となく読み、教わった実話だが、多くを忘れて骨や芯だけになっていた。それでも熊本の誇れる心であることはしっかり残っている。久しぶりにこの絵本から、失っていた肉付けがわき上がってきた。

吹上樋（逆サイフォン）を用いた日本最大の水路石橋「通潤橋」は1852年に着工し、1854年に完成した。江戸では1853年のペリーの黒船来航で大騒ぎとなっていた時代。企画者の惣庄屋・布田保之助の情熱と種山石工集団の高度な技術力、地域農民の労力を合わせた民主主義の[redacted]事業が、江戸末期の肥後で結実したのは驚くことである。

水不足に悩み、作物が育たない荒れ地の白糸台地に、通潤橋の3本の石樋を渡った水が噴き上がり、八つの村を潤した。現在も170㌶の田畑へ豊かな水を運び続けている。

この町に「通潤魂」という言葉があるらしい。創意工夫、協調、不屈の精神、勤勉と郷土愛をまとめた言葉だという。この橋造りのさまざまなシーンから生まれた言葉で、次世代に受け継ぐ、子どもたちの志の芯になるだろう。

子ども時代にこの絵本の内容に触れ、年齢が上がるにつれて作業の詳細や心持ち、心構えの人間観察を促していくのも良いではないか。そして、布田保之助のような優秀なリーダーを夢みて、調べていくと、交友のあった宮部鼎蔵や横井小楠にも繋がることが分かったり、種山石工の岩永三五郎や丈八（架橋後、橋本勘五郎）など多くの石橋や技術者に興味を持ったりすることもあるだろう。そうやって視野や知識が広がることも、大きく豊かな通潤魂と言えるのではないだろうか。

大人が辿ってきたように、何度も読んでほしい。まずこの絵本が、熊本の子どもたちの感動への入り口になり、「通潤魂」が将来の逞しい志の礎になってほしいものである。

評・松木良介